

◆◇「海技の伝承」◆◇

伝えたい船の話 捕鯨船を抑留から救った瀬口船長②

昭和20年8月、「第一太平丸」の砲手は瀬口群造船長砲手。千島択捉の年萌事業所で操業していたが、運搬船2隻が魚雷攻撃を受けて沈没した。陸上職員も便乗して全員で年萌を引き上げる。8月15日10時に出発、その途中、正午に玉音放送が流れた

▽色丹島から根室、そして霧多布へ

「オーイ終戦らしいぞ」と通信長の大きな慌てた声に、船内は一時騒然となった。

各船は夕刻前に色丹島に無事に入港し、駐屯している陸軍の事務所に対応策を伺う。

「戦争は終わったので事業を再開して宜しい」との回答が色丹島の事業場から各船に伝えられ、事業再開をみんな素直に喜んだ。が、その中で唯一人、瀬口群造船長は「みんな何を言うとするんじゃ、戦争に負けたんだぞ、内地と連絡が全く取れない今の状態で捕鯨再開など、冗談じゃないヨ！直ぐ根室まででも帰国すべきじゃないか」と厳しい意見を述べた。

このもっともな意見に他船も賛同し、翌8月16日の朝、捕鯨船7隻全船は色丹島を出航し根室に向かった。陸上社員は、全員が色丹事務所に残った。

根室港に寄港した後、すぐ霧多布事業場に回航、到着後、マッカーサー指令「100トン以上の船舶の航行禁止」が通達された。そしてその3日程あとには、ソ連軍が北方四島に進駐して各島を占拠してしまった。

後年聞いた話では、色丹島の捕鯨事務所に勤務していた女子事務員の「川上さん」は、サア大変だと、頭を坊主刈りにして男装し、顔一面に釜のヘグロ（墨）をベッタリと塗りつけ、島内の漁船に頼んで脱出したという。また、島に残留した陸上社員は、全員が樺太方面に連行、抑留され、2～3年の重労働に従事させられたという。

正に劇的な決断と行動ではなかったか。あの時、陸軍駐屯部隊の判断を受けて島に留まって居たら、全船と捕鯨乗組員が拿捕抑留^{だ ほよくりゅう}の運命に遭っていただろう。

瀬口群造船長の情勢を見通した適切な判断と果敢な決断によって7隻の捕鯨船とその全乗組員が救われたのだ。生涯、敬愛疎かに出来ない捕鯨人生の1ページである。

瀬口船長は戦時中、初代「興南丸」に乗船して海軍徴用船として南方海域の第一線に出動。

魚雷が命中して炎上した海軍駆潜艇の船首部に「興南丸」の船首部を接舷して乗組員の殆どを救助したことで名譽ある金鵝勲章^{きんかくしんしょう}を授与された歴戦の士でもあった。